

世界に発信する アーティストたち

No.5

上前智祐 CHIYU UEMAE



92歳にして現役のアーティスト・上前智祐は「具体美術」から本格的な活動を始めた。現在、アメリカから大きな関心が寄せられ、美術館などでの展覧会が行われる

瀬戸内海の瀬戸大橋の見えるアトリエで、92歳の上前智祐は現在もアーティストとしての活動を行っている。来年も、アメリカでのグッゲンハイム美術館での展覧会などでの発表が控えている。しかし、どんなに周りが変化しても、これまで作家として歩んできた道を今も悠然と歩んでいる。現代美術家としてのこのゆるぎない姿勢が、大きく評価される仕事を残してきた。そして、今も制作は続いている。

——今年はアメリカのロサンゼルス現代美術館での展覧会やアートフェアで大成功を収めたと聞いていますが感想はありますか。

上前 大変うれしいです。展覧会に出品する作品はありますが、まだ制作しています。これからは海外で多くの方々に見ていただければ嬉しいと思っています。

——今年の春、軽井沢ニューアーツミュージアム (KAWAZUMI) の開館記念展「軽井沢の風展 日本現代アート1950-1950」現在の「いま」の中で上前先生の作品が大きく取り上げられて以来の、慌ただしい展開になりましたが、どうお思いですか。

上前 作品を知ってもらえるようになったことにはとても感謝しています。しかし、私としては正直なところ、こうなることを別に考えたことがありませんからね。ただ、毎日、創りたい作品のことがあって、それをどうしようかということくらいしか考えていませんから。——今も、作品制作が忙しいの

ですか。

上前 僕は僕として作品を作りたい。このアトリエにあるように、今までは、おが屑とかボンドで固めた作品を創っていましたが、もうこういう仕事もできないし、だから版画を創っていいんじゃない。以前は自分で工房に通って、版画を創ったことがあるんですよ。ところが腐食や、さまざまな作業に物凄く時間のかかる仕事なので、今は版画は指示をして人に刷ってもらっているわけです。これも20年以上は付きあっている銅版とシルクの二人の刷り師がいますから、僕の考え方を知っていますからね。

——作品のアイデアはどんどん出てくるわけですね。

上前 今でもアイデアはどんどんできてきている。版画ならいくらでもアイデアが浮かんできませんね。なぜかというとな版画といえ、これはもともと現代美術として改革していく可能性がある表現です。アートのことを考えたしたら寝られないほど、や

りたいことが出てきますね。自由に考えて版画を捉えてやっていくと、いろんなことができませんね。

——こうして現在も旺盛に制作されている先生からすれば、すでに遠い昔の話になるでしょうけど、戦後の「具体美術」が目ざされて、その作家として上前先生も取り上げられてきたわけですね。先生にとっても「具体美術」は重要な出会いでしたか。

上前 そうですね「具体美術」というのは、私にとっては大きな影響を受けたものです。当時は戦後で、新しい美術をという気運があって、もちろん僕の中の意識もそういうことに向いていました。最初は第二期会の第一回展（1947年）に入選しているんです。それで京都の黒田重太郎先生の教室が京都にあったので、私は舞鶴から通いました。ところがその教室で学ぶことよりも、京都へ行ったということが大きな変化に繋がりました。京都の百貨店でね、大



上前智祐<作品> 1963-1967年

展覧会に出品できる作品はあります。 海外で見いただく機会ができれば嬉しい。



上前智祐<縫立体1> 1983年

きな展覧会で自由美術の大作が並んでいたわけです。これには物凄く感動してね、もう舞鶴におっちはあかんということ、その頃はクレインの免許証もらって、それで初めてその免許証で神戸にでてきたわけです。

——美術を本格的にやってこういうことで職にも付いて万全の体制で臨んだわけですね。

上前 その後、その二期会に半具象の作品を出品したんですが、100号などの作品5、6点が全部落とされました。それで反発してね、何とか悩んで悩んで、どういう風に自分の作品が新しい作品で行けるのかなということを考えていったわけです。そしてその頃に、吉原治良の、もうとんでもない作品に出

合った。最初はこれでも作品かと僕は思いましたね。クレパスの会社が展覧会を開催していたわけですけど、その中の吉原治良の作品は人を馬鹿にしたようなもので。それまで名前は知っていたけど、あんな有名な人がなんでこんなしょうもない作品を描くのかと最初は思いました。それでも、この人と一度話して



略歴

- 1920年 京都府中郡奥大野村に生まれる
- 1924年 耳を患い生涯難聴となる
- 1947年 第二期会第1回展 初入選
- 1952年 クレバス画とデッサンによる初個展（西舞鶴図書館）
- 1954年 前衛美術グループ「具体美術協会」の結成に参加（72年の解散まで全展に出品）
- モダンアート展に参加（1970年まで全展に出品）
- 1958年 「新しい絵画世界展—アンフォルメルと具体—」
- 1964年 「現代美術の動向 絵画と彫刻展」（国立近代美術館 京都分館）
- 1985年 「海外の嵐・1950年代—アンフォルメル・具体美術・コブラ—」
国立国際美術館
- 1986年 「スペイン・ユーゴスラビア帰国記念展 具体—行為と絵画—」
兵庫県立近代美術館
- 1990年 「前衛の日本—1950年代の具体グループ—」ローマ国立近代美術館
- 1991年 「絵画の冒険者たち『具体』展」福岡市美術館
- 1999年 「集合と網密のコスモロジー— 上前智祐展」大阪府立現代美術センター
「具体バリ 凱旋帰郷展・上前智祐舞鶴展」舞鶴市制記念館
「ブルーメール賞」「紺綬褒章」「兵庫県文化賞」を受ける
「上前智祐 80歳 作品の不思議」伊丹市工芸センター
- 2001年 「点と面の詩情—上前智祐・山中嘉一・坪田政彦展」
- 2008年 和歌山県立近代美術
- 2012年 「軽井沢の風展—日本の現代アート1950—現在（いま）」
軽井沢ニューアートミュージアム（KaNAM）
「『具体』—ニッポンの前衛18年の軌跡」国立新美術館
「Painting the Void(虚空・終焉を描く):1949-1962」
ロサンゼルス現代美術館
「—卒寿を超えて—『上前智祐の自画道』」BBプラザ美術館

●—卒寿を超えて—「上前智祐の自画道」
前期 2012年11月3日→12月24日
後期 2013年1月5日→2月17日



りますが、小さい頃からの奉公で自然に身に着いた世界でもあるわけですか。

上前 僕が力説したいのは、やはりこの縫いの作品ですよ。これはものすごく変化するし、人が僕の作品を見て、この縫った作品を見て物凄く感動してくれます。その縫いの作品は、作り方もいろいろ変化している。構想ははじめから考えてやっているけど、縫うというところで、いろいろ変化してくる。はじめは

ねファイバーアートと違うという意識があるから、皆、作品を枠に張っていた。枠を作った張るだけでも大変なことだったね、ちよつとでもゆがむと駄目だから。この縫いの作品を制作すると、首が痛いもんだからね、去年は接骨院に通って、治してもらおうと思っただけど、ところが良くならない。手も上がらんようになって、それで、神戸大学の病院に行つて、縫い作品をやっている手が上がらなくなったと

言つたら、そんな筈はないと言うわけです。病院も分からんわけよ。だからまあ、一応、手が上がらんからね、首から麻酔のブロック注射を打つてね、そんなのに通いながら痛いのを我慢して縫いの作品を作っていたわけですよ。

—それほど過酷な状態で仕事を続けられるということですか。それまでもやはり作品制作している。上前 そうですね。時間がかかってもやはり仕上がるということ

に対しては欲びがありますから。時間がかかることは最初から意識して制作しているわけですけど、自然にそういう風になつて行くわけです。これではちよつと違うなとか、そういうことを考えながらやつていく、その続きを重ねていくということになると思います。

—タブローも縫いも、時間のかかる仕事ですが、嫌になることはないのでしょうかね。上前 嫌になることはないです。無いからここまで続いている（笑い）

—本当ですね。これからもいろいろと忙しくなると思いますが、お体を大切に制作に励んでください。ありがとうございます。



上前智祐 < Untitled > 1975-80年

みたいと吉原治良の家に一人で行つたんですよ。

—それは「具体美術」が設立される前ですか。

から言われたわけです。—それはシヨックでしたか。

上前 変わった作家ですし、言われても、尊敬していましたが、それから、そこから一週間に1回か2回ぐらい作品を持って見てもらつたんです。そうしているうちにだんだん吉原治良の言っていることが理解できて、作品制作の方向性も分かってきました。

—吉原治良のところへきているのは他の作家もいましたか

上前 いましたね。その人たちはちよつとアクションがかった作品が多かつたと思います。僕

追及されてきたんですね。二期会で具象から半具象に変わり、そこから「具体美術」でその流れをより明確に確立してきたわけですね。

上前 それよりも僕は小学校を

出て京染の洗い張りの丁稚奉公しているわけやけど、そこですでに具象系の作品がほとんど見られない訳だよ。すべてが抽象と言うよりもデザイン。そこでも僕が学んでいるという意識はないにしてもすでにそこで興味を持っていったわけ。柄にしても、縦じまの矢絰（やがすり）にしても、いろんな柄があるでしょう。まず、生地、織物そういうものにしても自然に興味を持つわけですよ。だから、親しみを持つて言えるわけで。いまではファイバーアートという言葉はあるけど、その時分にはファイバーアートという言葉もなかった。

—美術を意識して制作する以前から伝統の中で早くから自然に学んだということもあるんですね。

上前 そうそう。

—先生の作品は非常に丹精をこめて、時間をかけて制作する作品ばかりだと思えますが、タブローとは別の「縫い」の作品も先生の中では大きな位置がある。